

人生は
決まり
で
文句

あいまいな「アーマイ」

磯貝 日月

(いそがい ひづき)

総合研究大学院大学文化科学研究科

魔法のことば

ヤマハ製のモーターが付いた船外機ボートが極北の海をゆつくりと走っていく。無機質な太陽は極北の大地を照らし、八月初旬ではあるが、冷たい風がかすかに肌にささる。空と海の青一色の景色のなか、ボートの上には無口な父と多弁な子。わずかな夏のあいだ、極北の民イヌイットはボートを使った狩猟、漁撈を営む。ボートを海岸に止め、小高い岩で双眼鏡を覗き込みながら、子は父に問いかける。「どこに行こうか?」「アーマイ」「何を探そうか?」「アーマイ」「あのあたりにカリブー(トナカイの一種)がいるんじゃない?」「アーマイ」。父の返答はすべて「アーマイ」。イヌイット英語辞書で調べると、「アーマイ」は「don't know(わからない)」と載っている。だが、イヌイットの村に滞在していると、「アーマイ」には、「わからない」以上の意味が込められているような気がする。「アーマイ」は非常にあいまいであるが、人を魅了する魔法のことばであり、イヌイットの人生観がこのことばでよくわかる。

カナダ極北地方のヌナブト準州内にあるホエール・コーフ村。人口およそ三〇〇人の九割近くがカナダの先住民イヌイットだ。ハドソン湾西岸に位置するこの村は豊かな動植物に囲まれている。村をぶらぶらと歩いて、イヌイット同士の会話

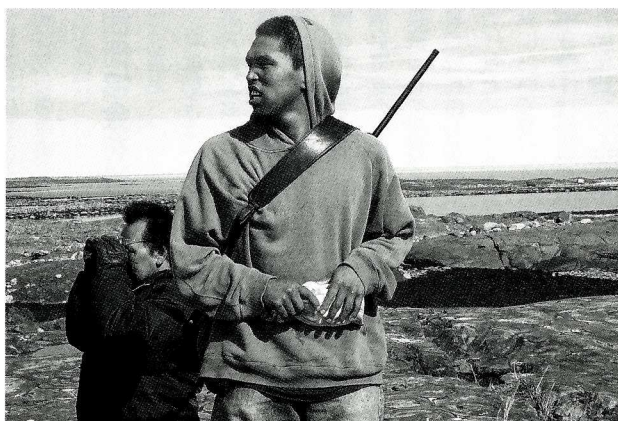
を聞いていると、イヌイットが日常的に「アーマイ」を使用しているのがわかる。「わからない」という意味でも用いるが、「なんともいいがたい」「それはこうだけれど、あなたには教えない」「それはいわなくても、わかるだろう」「そんなことは、どうでもいいじゃないか」など、ことばの裏にはたくさん意味が隠されている。行間を読む楽しみが、この「アーマイ」にはある。

父から子へ、孫へ

冒頭の狩猟の場面。父はハンドルを握りあたりを見まわす。子はボートの先端で背中を銃をかつぎ、父とは反対側に目をやる。一〇メートル先の水際でカリブーが水を飲んでいる。子はオレンジ色の耳栓をし、ボートの先端で銃を構える。「もう撃つていい?」「アーマイ」。父は子に狩猟のやり方を懇切丁寧に手とり足とり教えるわけではない。ときに助言はするが、ここでの「アーマイ」ということばには、「息子よ、自分で狩猟のやり方を学びなさい」という意味が込められている。カリブーをしとめ、肉を解体し、息子は内臓にかぶりつく。父と子は肉を食べながら、あのとときはこうだった、ああだった、と話し合う。

「アーマイ」にことばの定義をあてはめるのは、むずかしい。「アーマイ」は「アー

ホエール・コーフ村近くの島でカリブーを探す父(左)と子



マイ」である。人生はあいまいでわからないからこそ楽しい。「アーマイ」を聞いたびにそんな気になる。子には三歳の息子と一歳の娘がいる。「アーマイ」は父から子へ、そして、孫へと引き継がれていく。きつと彼が父親の年齢になり、息子に尋ねられたときにこうこたえるだろう。「今日は何を捕ろうか?」「アーマイ」。